

コテージ・ガーデン

—— 内向するイングリッシュネス（2）

安西 信一

五 社会的交錯の場——階級と産業の問題

以上みたように、コテージ（・ガーデン）は、ジェントリ的な美的世界と、現実の貧民の側における実用世界との両面にかかわり、ときに両階級の世界が亀裂をはらみつつ交錯し、またときに調停されようとする場であった⁽⁸⁷⁾。このようなコテージ（・ガーデン）をめぐる階級間の交錯ないし曖昧さは、特に十八世紀の末以降、顕著になってゆくようにおもわれる。さらにまた、もともと貧しい労働者のためのものであるコテージ（・ガーデン）には、当然のことながら、当時新たに前景化してきた産業革命の影響も関係してくる。この産業革命との関係は、本稿の主題である、コテージ・ガーデンの閉塞と過去志向的なイングリッシュネスを考える上で決定的に重要であるようにおもわれる。

以下、十九世紀のコテージ（・ガーデン）における、こうした階級や産業といった社会的要因の交錯を、いっそう詳しく検討したい。その中で、冒頭で引いたウィーダにみられたような、十九世紀末以降に特徴的な諸要素が徐々に顕著になってくるはずである。

階級的曖昧さ

繰り返せば、先のバーナードは、ジェントリ的な装飾的コテージと、現実の貧民が住むコテージとが乖離していることを嘆いていた。さらにナイトは、両者の美的次元での融合が不可能だとさえ断言していた⁽⁸⁸⁾。ここからも、この〈上から〉および〈下から〉の二つのコテージ志向のあいだに、抜き差しがたい階級的な断絶が存在したのは明らかである。実際、両者をめぐる言説編成の少なくとも中心部は、相対的に独立に展開している。しかし、バーナードは他方でこの二つの流れの交錯を提起していた。またナイトの隣人、プライスも、現実の貧民をジェントリの装飾的コテージに住ませようとしていたのである。つまり両者の階級的な断絶は、実は時として曖昧でもあった。

この階級的な曖昧さは、当時のコテージのパターン・ブックにさえみられよう。それらは、もともとは上流階級のために出版されたものであるが、しかし両階級の住宅建築の本質的な同質性を説くものが少なくないのである。たとえば建築家ジョン・ウッド(John Wood, the Younger, 1728-82)は、早くも一七八一年、コテージのパターン・ブックとしては最初のものの中で、先に言及したウィトルウィウス＝ローゼ的な建築のプリミティヴィズムと人間的感情の普遍性に基づきつつ、次のように主張していた。

最も単純な小屋(hut)の平面と、最も優れた宮殿の平面とのあいだには、一続きの漸次的な移行がある。つまり、宮殿とは改良されたコテージに他ならない。……高い地位にある人間の感情と、貧しいコテージの住人の感情とはきわめて似ている。つまりコテージの住人も、暖かく、楽しく、快適な住まいさえあれば、そこに喜んで帰り、楽しく暮らすのである。⁽⁸⁹⁾

同様に、先に挙げたモルトンのパターン・ブック(一七九八年)でも次のようにいわれる。

〔本書のデザイン〕を、まずは貴族やジェントルマンの方々へのヒントとして供したい。すなわち、自分のために建てる隠遁所をコテージのようにみせたいとおもっている方々、あるいは小作人や他の借地農のための住居を建てたいとおもっている方々である。また同時に〔本書のデザイン〕を、農民のためにも供したい。すなわち、自分の住まいを建てる時、周囲の景観と調和し、呼応するようにしたいとおもっている農民の導きとしてである。(Malton, op.cit., p. 27)

明らかにこれらでは、〈上から〉と〈下から〉のコテージ改良が交錯し、混交している。さらに下って、十九世紀の最も重要な造園理論家、ラウドン (John Claudius London, 1783-1843) もまた、イギリスにおける権利の平等性に基づいて、もともと上流階級むけのヴィラおよび農場と、コテージおよび庭園との間に、本質的な階級的垣根がないことを主張することになる。ラウドンはいう。

ヴィラの住まいとは、単にコテージを大きくしたものとしてみ考えられねばならない。またヴィラのまわりの土地〔庭園〕は、単に〔コテージの〕農場の土地〔を大きくしたもの〕と考えねばならない。……思うに最も粗末なコテージでさえ、ヴィラの住まいに必須の快適さをすべて含まねばならない。……すべての住人が平等の権利をもつ国にあっては、勤勉な個人ならだれしも、都会に住んでいない場合には、コテージとガーデンを所有するだろう。そして自分の営みで成功し、金銭上の独立を獲得した者ならだれしも、ヴィラをもつことができる。(90)

交錯の危険

しかし、コテージ（・ガーデン）におけるこのような階級の交錯は、上述のシェンストンやナイト（あるいはレプトン⁽⁹¹⁾）にみられたとおり、両者のあいだの軋轢や葛藤を引き起こしてしまいうる。

そうした階級の交錯がはらむ問題をよく示す、比較的早くまた有名な例として、ジェーン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の小説、『分別と多感』(一八一一年) をみてみよう⁽²⁾。ここでは下層ジェントリに属する主人公一家が、やむをえずかなり貧しいコテージ (Barton Cottage) に住まねばならなくなる。だがその暮らしは、現実にはけっして快適ではない。ここでオースティンは、先の装飾的コテージやピクチャレスクな慈善に代表されるような、コテージをめぐるジェントリのロマンティックな熱狂、幻想にたいして、現実の側からの批判を加えているようにおもわれる。たとえば彼女は、流行情に敏感なジェントリのロバート・フェラーズに、次のように語らせる。ここで彼の言葉は、明らかに批判の対象として書かれている。

「ロバートはいった。」「僕もコテージは大好きです。コテージはいつもとても快適で優雅ですから。余分なお金があったら、ロンドンのそばに小さな土地を買い、自分でコテージを建てるつもりです。好きなときに馬車で出かけ、みんなで楽しむんです。なにかを新築しようとしている人には、かならずコテージを建てるよう勧めています。……コテージには設備もなく、狭苦しいと考える人もいますが、大間違いです。……やり方さえ心得れば、コテージはどんな大邸宅にも劣らないほど快適なんです」。

エリノアはすべて同意した。このような相手には、理性的な反論などもったいないとおもったからである。⁽³⁾

ここでオースティンは、ジェントリが、装飾的コテージなどを通じて抱いているロマンティックな〈上から〉のコテージ改良の幻想を明らかに風刺している。それは現実の下層のコテージには当てはまらず、両者は融合しないことが示唆されているのである。

またロバートの弟で、主人公エリノアと結婚することになるエドワード・フェラーズは、ロバートとは対照的に非ロマ

ンティックであり、「ピクチャレスクの諸原理」をも解さず、次のようにいう。

僕は廃墟となった荒れ果てたコテージは嫌いです。……物見の塔（庭園建築物）よりも、気持ちのよい農場の家の方が好きです。世界で最良の盗賊一味（ピクチャレスクの模範とされたサルヴァートル・ローザの絵に出てくる）よりも、綺麗で幸福な村が続く方が楽しいんです。⁽⁹⁴⁾

これを、主人公エリノアの妹で、極度にロマンティックなマリアンは呆れ顔でみる。しかし最終的に作者オースティンは、むしろエドワードの非ロマンティックで現実的な見方に与しているようにおもわれる。たとえば、マリアンと恋愛関係にあるロマンティックな登場人物ウィロビーは、主人公たちが住むコテージを「改良する」(improve) ことに強く反対して次のようにいう。

この愛すべきコテージを改良するですって！ 絶対に反対です。壁に石一つたりとも足してはなりませんし、一インチたりとも変えてはなりません。わたしの感情を汲んでいただけるなら。……なにもかもこのまま。便利だろうが不便だろうが、寸分も変えてはなりません。⁽⁹⁵⁾

明らかにオースティンは、コテージにたいするこうしたロマンティックな愛着、装飾的コテージにみられたようなジェントリの非現実的な見方を、批判的に描いている（この発言をするウィロビーは基本的に悪役といつてよい）。

一般に「改良」ないし進歩にたいする態度は、コテージ（・ガーデン）を考えるうえで重要な鍵となるようにおもわれる。これに関してはすぐ後で考察したい。今、オースティン自身について一言しておけば、彼女は他の小説、特に『マンスフィー

ルド・パーク』(Mansfield Park, 1814)では、地所の「改良」にたいしておおむね批判的である⁽⁹⁶⁾。しかし以上からすればこの小説、『分別と多感』のこの場面では、むしろコテージの現実的改良に賛成しているようにおもわれる。そして彼女ここでは装飾的コテージにみられるようなジェントリ的な幻想に批判的であることからして、結果的に、〈下から〉のコテージ改良に近い立場にいたっているということもできよう⁽⁹⁷⁾。

コテージにおける階級的な交錯がはらむ危険は、後の小説でもしばしば取り上げられる。たとえば、オリファント (Margaret Oliphant, 1828-97) の『マーチバンクス嬢』(一八六六年)やジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-80) の『ミドルマーチ』(一八七一一七二年)など、〈上から〉の過度の博愛主義を实践・夢想するジェントリを、両義性をはらみつつ風刺的に扱った小説が挙げられるだろう⁽⁹⁸⁾。

他方、〈下から〉のコテージ・ガーデン改良、すなわちアロットメント運動もまた、階級の交錯の危険をはらみえた。たとえば、当時一般向けに書かれた百科事典の項目、「コテージ・アロットメント」(一八三七年)には、次のようにある。

一般に農場主 (farmer) たちは、「コテージ・アロットメント」のシステムに、強い敵対心をもっている。……コテージ・アロットメントのシステムにたいしては、次のような強い反対意見が述べられてきた。アロットメントは早すぎる結婚を促し、乞食の一群を生み出すだけだと。確かに、コテージのアロットメントがこうした結果をもたらすこともあるだろう。しかしこの非難がなされうる、また実際になされてきたのは、主として大きすぎるコテージのアロットメントにたいしてにすぎない。もしもコテージ住人がそうした大きすぎるアロットメントを耕作するならば、彼の性格はもはや労働者ではなくなってしまう、十分な資本金を欠いた農場主になってしまうのである。⁽⁹⁹⁾

ここで表明されているような懸念、すなわちアロットメントが貧民を本来の低い地位から解放してしまい、その結果怠惰に

なったり、性的無計画や飲酒に陥ったり、あるいは逆に独立して農場主と同じような地位をえてしまうという懸念は、アロットメントを推進する多くの書物の中でたびたび表明されている⁽¹⁰⁾。というよりもむしろ、それらの書物のかなりの部分は、こうした広く行き渡った懸念にたいして再反論するために書かれているといつてよい。それらが示しているのは、貧民への不信心であり、中でも重要なのは、貧民がアロットメントに時間と労力を割くあまり、農場主などの雇い主にたいして行すべき本来の仕事を怠ってしまうのではないかとこの懸念である。

典型的な例として、先述の造園家ラウドンが編集した。アロットメントを奨励する書物（一八三〇年）を引いてみよう。ラウドンはここで、コテージのアロットメントにたいしてありうる批判として、「アイルランドのコテージ住人が土地を持ち、さらには牛をも所有し、それを商売としている、つまりそれが主要な生活源となってしまう」という事実の指摘を想定し、これに再反論する形で次のよう述べる。

しかし、われわれの「アロットメントの」提案は、ただ生活源として「別の」正規の仕事 (regular business) に従事しているような人々を対象としているにすぎない。要するに、現在求められている労働力の需要が必要とするような人々である。われわれはそういう人々が、ガーデンつきコテージをもつべきだと提案しているだけである。つまり彼らが余暇時間に獲得できる生活の糧をえるためにのみ、ガーデンに依存すべきだと提案しているにすぎない。……それゆえ人々の非難は当たらないだろう。すなわち、貧民の快適さを増すことで、結局は貧民の増加に拍車をかけ、将来のみじめさを生み出しているにすぎないという非難である。⁽¹⁰⁾

上述のように、アロットメント運動のような〈下から〉のコテージ・ガーデンの改良は、もともと、貧民に「独立」を与えることで社会全体の安定を目指すものであった。しかしここでは、その結果、彼らを本来の低い地位から不当に引

き揚げてしまい、危険な階級の交錯、最終的には社会秩序の混乱を招来しかねないというジレンマが表明されている。それゆえラウドン等、〈下から〉の改良の推進者たちは、この危惧に反駁せねばならなかったのである。

産業革命と庭園の閉塞

以上のようなコテージ（・ガーデン）をめぐる階級的交錯において鍵となるのは、先に触れた「改良」（improvement）への態度であろう。それは本稿の最も大きなテーマである庭園の閉塞と過去志向を考える上で、きわめて重要であるようにおもわれる。というのも、結論を先取りしていえば、一九世紀においてこの「改良」が行き着く先である産業革命の影響にたいし、庭園が最終的に閉塞するにつれて、美的でノスタルジックな、イングリッシュネスの典型としてのコテージ・ガーデンが前景化してくると考えられるからである。

まず一方のジェントリ側からの美的でロマンティックな〈上から〉のコテージ改良は、先のモルトンのパターン・ブックや、オースティンの風刺にみられたように、プリミティヴィズムとも結びつき、現実の社会的公共性に背を向けることで、むしろ逆に反〓改良的、反〓進歩主義的、過去志向的になりやすい。

他方、それとは反対に、アロットメント運動のような〈下から〉のコテージ改良は、現実の社会改良を志向し、進歩主義的であり、産業革命にたいしても親近的である。たとえば、アロットメントを推進する一八三一年の重要な著作では、貧民のコテージへの産業革命の影響を明確に歓迎している。

コテージの快適さは著しく増大してきた。かつては余計な贅沢品と考えらえたものも、田園全体が改良されたおかげで広く使われるようになり、習慣によってほとんど必需品になっている。下層の階級は、文明や有用な技術の進歩の恩恵に浴してはならないと望むなどというのは、彼らがそれをするなら他のものを捨てねばならないと考えるのと同じく、

不公平であり、思いやりを欠く。(102)

同様に進歩主義的な傾向の強いラウドンも、産業革命とコテージ・ガーデンとが両立し、むしろ親和的だと考えている。

手工業者、具体的にいえば、作業熟練工、製造業者、小商人、他の田園の職人がもつコテージ・ガーデン。……この種の庭のうち、豊かさ・秩序・美の点で最も注目すべきは、その発祥の地、ノリッチのものである。またロンドン、スピタルフィールズにおける絹織工の住まいのもの、マンチェスターや他のランカシャーおよびチェシャーのもの、さらにペイズリーやグラスゴーのものなど。これらの庭をもつ者は一般に自営であり、自宅に織機や商売の道具をもつ。そして商人かつ製造業者に雇われるか、自分の商品を公共の市場にもってゆく。彼らは一般に知的で勤勉な階級の人間であり、自分の庭を大いに楽しむ。特に彼らが優れている実践は、フローリスト〔草花栽培家〕の花の栽培である。(103)

ここでラウドンは、産業革命が発展させた新興諸都市における労働者たちが、社会における産業活動を活発に行いつつ、同時にコテージ・ガーデンを愛する者であることを、樂觀的に称えている。実際、この種の花の栽培を中心とした労働者の庭（いわゆる「フローリスト」の庭）は、産業都市で大いに興隆した。

しかし、このラウドンのような産業革命とコテージ（・ガーデン）との両立にかなする樂觀主義は、かならずしも一般的ではない。たとえば、先にも引いたホーウィットをみてみよう。彼はラウドンとほぼ同時期（一八三八年）に書いているのだが、装飾的コテージにたいしてはアンビヴァレントな態度を取りつつ、田園における下層民のコテージの現実に目を向けさせようとする(104)。そして次のように、産業社会とコテージとを鋭く対立させるのである。

しかし、暗い面から明るい面へと、一瞬目を向けてみよう。世界広しといえども、われらがイングランドのコテージほど美しい眺めはない。それらは、この国に田園の中でも、時代の暴力的な変化がまだはっきりと感じられない部分にみられる。そこではいまだ産業 (manufactures) が、赤く、けばけばしく、むき出しのレンガの家や、さらにもっと悪いビール酒場と不道徳を導入していない。実際そこには、より原始的な質素さがいまだに残っているのである。⁽¹⁰⁵⁾

ここで産業革命は否定的にとらえられ(「時代の暴力的な変化」)、コテージはその侵食をかううじて免れている。注目すべきは、コテージは明らかに過去志向的なものとして、また古き良きイングリッシュネスを典型的に体现するものとして捉えられている点である。この種の発言は、後に一種の定型となつてゆく。

ここでやや視野を広げ、庭園史一般に目を転じるならば、たとえば上のラウドンの先駆者ともいうべき十九世紀初頭のレプトンには、すでに産業的なものを庭園(彼の場合は基本的に風景式庭園)から排除しようという顕著な傾向がみられた⁽¹⁰⁶⁾。そして、このような産業社会からの庭園の閉塞を加速したのが、時代は下るが、十九世紀末のイギリスにおける整形式庭園の復活運動である。たとえば、その急先鋒ともいうべき論者・実践家のブロムフィールド (Sir Reginald Theodore Blomfield, 1856-1942) はこう。

「庭園の」境界線は、庭園の壁によるものであれ、道や花壇の線によるものであれ、明確に隠すことなく示さねばならない。庭園は、デザイナーがおもうまさにそのとおりに作られるべき、囲い込まれた (enclosed) 空間として扱わねばならない。⁽¹⁰⁷⁾

また、ブロムフィールドと同じ流れに属するセディング (John Dando Sedding, 1838-91) も、次のように庭園が閉塞される

ことを要請する。

向こうの葉の茂みは、庭園を囲み……立ち並ぶヴィラと、その先の巨大な紙工場を隠す。……庭園の芝地は平穩の光景であり、その静かな優美さは、都会生活の喧騒の中で労働時間を過ごさなければならぬ人々にとって、筆舌に尽くしがたい価値をもつ恵みなのである。(108)

このような、現実の産業社会からの庭園の閉塞は、やはり同じ流れに属し、アーツ・アンド・クラフツ運動の担い手でもあった、プライアー (Edward Schroeder Prior, 1857-1932) によっていっそう明確に述べられている。さらに時代は下るが (一九〇〇年)、典型的な発言として引いておきたい。

造園芸術を縛る現実的な条件の一つは、囲い込むこと (enclosure) である。……十八世紀のイングランドには、喜んで眺めたいとおもう美しい広い場所がいくつもあった。しかし現在では、多くは醜い荒廃しか見当たらない。現在の建築術は、庭園の壁を越えてまで眺めたいとおもわせるものをほとんど残してくれない。……自己の閉ざされた地所を超えるものはすべて、建築業者のなすがままであり、汚く広がる郊外や、開発業者の気まぐれや、建築家たちの恥知らずなあらゆる野望に脅かされている。今日では、むしろ「かつての」隠者の庵や修道院の条件を受け入れ、庭園は外部世界から閉ざさねばならないとする方が、ずっと得であるのは明らかである。囲い込まれた整形性こそ、真の庭園のモチーフを提供する。……壁に囲まれ、冬と荒天を防ぐのと同様、明確な境界線でもって、見苦しい十九世紀の建築から守られねばならない。(109)

以上のいくつかの発言は、かならずしもコテージ・ガーデンに坎するものではないし、大部分、現実の労働者、下層階級には坎かわらないものと考えられる。またプライアーも示唆する通り、汚れた外部世界にたいして庭園を閉ざすことは、もともとヨーロッパの古い「閉ざされた庭」(*hortus conclusus; the enclosed garden*)の伝統に属するものであった。とはいえ、同様に彼が示唆している通り、こうした新たな閉塞への傾向は、十八世紀の開けゆく風景式庭園のヴェクトルとは明確に対比されており、本稿のテーマにとって重要であろう。とりわけ、発展し行く産業社会に背を向け、むしろ過去志向的に閉塞するという点は、一九世紀後半以降の傾向をよく示している。

しかも再びコテージ・ガーデンに話を戻すならば、興味深いことに、このような閉塞への傾向は、進歩主義的であるはずのアロットメント運動の中にさえもみることができる。先にみたアロットメントについての多くの言説にあって、コテージ・ガーデンは外部の害悪（飲酒・怠惰・浪費等）を免れた、独立と徳を示す秩序の小空間であった。この点は先に確認した。しかしさらに、たとえばアロットメント運動に坎する十九世紀半ば過ぎのある書物では、土地への紐帯を強調する以前の論点を受け継ぎつつも、産業社会の流動性とコテージ（・ガーデン）とが対比されているようにおもわれる。

一般にコテージ住人は、どの国にあって最も固定された階級である。なるほど土地所有者は住所を変え、地所を売り、田園を離れるかもしれない。また商人、製造業者、機械工は、職業を変えるかもしれない。だが労働者は、残って土地を耕し、つねにそこに住むだろう。(11)

同書におけるコテージ（・ガーデン）は、道徳的・感情的な効果をもたらすとされているが、注目すべきことに、それは明らかに美的なものとなっている。これはそれまでのアロットメント運動の中ではほとんどみられなかった新しい要素である。この美的な態度は、極小の閉鎖空間にも向けられる。

コテージの窓におかれた花入りのポットは、日に日に興味を引くだろう。植物が窓に栽培してあるのをみると、そのコテージは平和と幸福に満ちていると考える。花々の素朴さと美しさは、心の最も精妙な感情を育む。……自然は、その多様な動きをつぶさに観察する者にたいして、多くの賢明で高貴な教えを伝えてくれる。たとえそれが広い広い世界であっても、花の咲く刺繍花壇にあって、あるいは狭く囲まれた (circumscribed limits) 花入りのポットであっても同じである。〔強調引用者〕⁽¹¹⁾

このように、コテージ (・ガーデン) は、進歩主義的であるはずのアロットメント運動の中でさえ、少なくとも十九世紀の後半以降、産業社会からは閉ざされた、過去志向的で美的でもある小空間となつてゆくようにおもわれる。

土地への回帰

こうした傾向の一般的な背景として、十九世紀後半以降、都会や産業の問題が深刻化し、その喧騒を避け、いっそう多くの都市民が田園へと内向的に回帰・逃避・退行してゆく動きがあげられるだろう。この動向は、ラスキン、モリス、エドワード・カーペンター (Edward Carpenter, 1844-1929) などの影響も受けた、いわゆる「土地への回帰」(Back to the Land) という大きな社会・芸術運動にもつながってゆく。この運動についてはマーシュの先駆的な研究があり⁽¹²⁾、詳細は同書に譲りたいが、本稿にとって重要なのは、コテージ (・ガーデン) もまた、その種の回帰の典型的な場となつていったことである。

たとえば、アート・アンド・クラフツ運動を推進した『スタジオ』誌に掲載の、「コテージの芸術的扱い」(一八九五年)と題された記事をみてみよう。そこで著者は、現代人が市場経済によるストレスから、「何週間か何ヶ月か、気軽に訪問することができ……社会や仕事の気遣いからの自由を感じるこのことのできる仮住まい」を必要とする主張している。そして実

際に、仕事場であるロンドンと、サリー、サセックス、ケント州などの田園との「二重生活」を営んでいる「職業人など中
庸な資産の人々」ないし「上流中産階級」が、ここ二、三年の間に増えたという⁽¹³⁾。また、むしろ逆にラファエロ前派や
ラスキンに反対した重要な美術雑誌、『アート・ジャーナル』にも、やはり次のような同様の記事（一八八一年）がみられ
る。

平均的イギリス人にとって、一片の土地の所有者となることほど満足を与えるものはない。どれほど狭くともよい。そ
こで彼は、自然の働き方のいくばくかを目にし、それを自分自身の労働と注意力で助ける幸せを享受することができる。
もちろんこれは、主に街路と建物しか目を引くものない、人の密集した都会に長時間閉じ込められることの多い人々に
とりわけよくあてはまる。というのも、一日、一週間、もしかすると一年間、仕事を続けた後、夏に田園を訪れることほ
ど快いものはないからである。⁽¹⁴⁾

実際、このような中産階級の田園志向、コテージ（・ガーデン）志向の時代、本稿冒頭で言及したアリンガムやその追従
者などの、コテージとガーデンを描いた絵画も非常な人気を博すようになる⁽¹⁵⁾。さらに鉄道網の拡張とツーリズムの興隆
にも支えられて、ヘルムライクが「コテージ・ツーリズム」と呼ぶような、コテージ探訪の旅も流行した⁽¹⁶⁾。また旅行に
行けない人々のために、無数のコテージ案内が出版されることにもなる⁽¹⁷⁾。そこにはしばしば、当時普及した写真術によ
る図版がつけられている。

こうした十九世紀後半以降の中産階級の土地回帰運動は、たしかに、上でみた〈上から〉・〈下から〉のコテージ改良運
動と、決して断絶しているわけではないであろう。たとえば、個人的な土地所有を強調するという常套句に関して、先の
『アート・ジャーナル』の記事は、アロットメント運動と微かに響きあっている。しかし、もちろんこれらの記事で推奨さ

れているのは、都会に住む中産階級の、田園における仮住まいにすぎない。貧民の住まいの現実的な改良が目指されているわけではないのである。むしろアリンガムの絵画がコテージ・ガーデンの現実を巧みに美化していたように⁽¹¹⁸⁾、この土地回帰運動におけるコテージ（・ガーデン）は、都会の中産階級の美的な息抜きとして仮構されているにすぎない。

典型的な例として、そうした中産階級の土地回帰運動を担った雑誌、『カントリー・ライフ』に掲載の「コテージ・ガーデン」という記事（一八九七年）をみてみよう。ここではアロットメントは一定程度評価されているものの、結局は軽視され、歴史的に真正な古いコテージ・ガーデンが称揚されている。

コテージ・ガーデンは、イングランドの多くの部分で何世紀にもわたり存在し繁栄してきた。アロットメントが考え付かれるよりもはるか以前からである。……なるほど、現代のアロットメント・システムは、不幸にもガーデンのないコテージをもつ人々を救うには大変すぐれている。しかしそれは、幸運にも現在もまだイングランドの田園によくみられる、喜ばしい古風なコテージ・ガーデンの代わりになることはありえない。⁽¹¹⁹⁾

この記事ではつねに、（おそらく中産階級の）外来者からの視線が想定され、庭はほとんどその美的な視線のもとでのみみられている。たとえば次のようにいわれる。

村の商店では、一見乱雑な配置がなされているようにみえる。同様に古いコテージ・ガーデンの配置にあっても、よそ者にははっきりわからないが、ある秩序が支配している。……何気なく立ち寄った人には、野菜も花も乱雑に絡み合ってみえるだろう。……けれどもこうした配置にしても、きちんと保たれた上流階級の庭園の規則的な端正さを見慣れた人にとって、十分魅力的なのである。（484）

しかも現代のコテージ・ガーデンに関しても結局、次のようにいわれ、農民の暮らしはほとんど視野に入っていない。「現代のコテージ住人は、『有用な植物ではなく』純粹に裝飾的な植物にたいするはつきりとした傾きを示している」(p.33)。

そのように現実の貧民の窮状をみないという点に関して、あるいはまた、先の『スタジオ』や『アート・ジャーナル』の記事にみられたように、公共圏の喧騒からの閉塞を強調するという常套句に関して、こうした土地回帰運動は、他方で、かつての裝飾的コテージのような〈上から〉のコテージ改良とも通じあう。しかしもちろん、ここでジェントリ的な大地所における美的世界の構築が考えられているわけではなく、その公共圏をなす都会は、中産階級自身が労働している新しい産業的な世界となっている。

さらに、『カントリー・ライフ』の記事にもみられたが、この新たな動きに関して顕著なのは、先のホーウィットにあったような、古き良きイングランドの田園が産業によって失われつつあるという認識であり、それを古いまま保存するという主張である。いいかえれば、コテージ(・ガーデン)の歴史的な「真正性」の問題が前景化してきている。たとえば、先に言及した多くのコテージ案内を出版したバッツフォードに関して、その甥は次のように証言する。

叔父ハーバート「バッツフォード」は、一般大衆受けをねらい、イギリスの家、大聖堂、教区教会堂、村、屋敷についての、図版のたくさん入った一連の大衆的教本を出版した。彼は正しかったとおもう。美はもはや単に少数の人間の特権ではなくなっていた。そして平均的イギリス人は、自分の島(イギリス)とその建物の歴史を切望し始めていたのである。(120)

実際、先に言及したバッツフォードらのコテージ案内には、歴史的に真正な多くの細部に関する古物収集的な記述があふれている。しかも著者は、しばしばその破壊を嘆き、保存を訴えているのである(121)。

こうした歴史意識は、庭園に関しても現れる。いにしえのガーデニングおよびイギリス古来の植物を重んじ、保つという考えかたである。たとえば、『アート・ジャーナル』掲載の「庭園における芸術」と題された別の記事（一八八二年）では、「花およびその栽培への愛」にたいするイギリス人の長年の「国民的熱狂」を破壊してしまうがゆえに、「花卉栽培の商業的な側面」を非難し、「以前のやり方への回帰」を勧めている⁽¹²²⁾。そしてこの記事が同時代のすぐれた造園家として推奨するのが、ロビンソンである。このロビンソンと、さらにジーキル二人の著作において、以上述べた傾向は、コテージ・ガーデンに関して完全に明確な形をとるにいたる。次に、この十九世紀末から二十世紀初頭のイギリスを代表する最も重要な二人の造園家について、節を改め考察したい。

六 内向き／後向きのイングリッシュネス——ロビンソンとジーキルの時代

ロビンソンとジーキルは友人であり、ジーキルはロビンソンが創刊した雑誌（*The Garden*）への重要な寄稿者でもあった。二人は基本的に「自然風」の造園を提唱する⁽¹²³⁾。とりわけ一八七〇年以降に書かれた彼らの著作は、いまだ今日でも読み継がれており、その後のイギリスの庭園観に決定的な影響を及ぼした造園家たちであったといってよい。

ロビンソン——閉塞、美、過去志向

二人のうち年長のロビンソン（William Robinson, 1838-1935）は、ヴィクトリア朝の人工的な庭園、特にカーペット・ベディングや外国の造園の導入を厳しく批判し、整形式庭園復興を唱える先のブロムフィールドとも激しい論争を繰り広げた⁽¹²⁴⁾。本稿にとって重要なのは、彼がイングラランド（特に南部）に実際に残っている、真正の古く小さな美しいコテージ・ガーデンを、本来のイングリッシュネスを体现した庭園の模範にしていることである。

たとえば、有名な著書、『野の庭』（一八七〇年）の中で、ロビンソンは、「シェイクスピア、ミルトン、ベーコンら」の時代における造園の「古いスタイル」が、現在も南イングランドに残存しているとして、次のように語る。

「この古いスタイル」の魅力は、いまなおケントやサセックスなど、イングランドの多くの部分における小さなコテージ・ガーデンにみられる。もっとも、そうした多くの甘美な小さなガーデンの美しい花々も、緋色のゼラニウムによって根絶され始めているのだが。……それらの小さな楽土では、美しき古きイングランドの造園がとどめる最後の姿を垣間みることができる。いまやそれに、現代的なシステムが取って代わろうとしている。⁽¹²⁵⁾

ここで古いスタイルを脅かす「現代的なシステム」とは、派手な外来植物を中心とするカーペット・ベディングなどを指すであろう。注目すべきは、顕著な過去志向性である。すなわち、ここで称賛されるコテージ・ガーデンは、明らかに過去の古き良きイングランドの、真正な残滓とされている。しかもそれは、今まさに消え去る寸前である。さらにこの過去志向性とも関連して、コテージ・ガーデンの「小ささ」および「美しさ」が強調されている点にも注意せねばならない。

ロビンソンは、やはりもう一つの有名な著書、『イングランドの花の庭』（初版一八八三年）においても、同様にコテージ・ガーデンの小ささと美を強調し、さらにそれが閉ざされたものだとしている。

「コテージ・ガーデン」は、小さな四角い土地の区画にすぎない。けれどもその美は、金で購えない。近くにある大きな庭園よりも、ずっと喜ばしいのが常である。……そこでは、小さな家と垣根とが防御となって、花々がよく育つ。⁽¹²⁶⁾

しかもコテージ・ガーデンは、イングランド（特にその南部）に固有のものとなされ、諸外国のものよりも優位に置かれている。

およそ人間が造ったものの中でも、イングランドのコテージ・ガーデンほど美しいものはない。それは他国でも例をみない。英仏海峡の向こう、ベルギーや北フランスのむき出しのコテージは、なにも生えておらず醜くおぞましい。アイルランドやスコットランドでさえ、これほど美しく小さな庭はみられない。イングランドでも、そこまでよくない場所もある。サリー、ケント、その他の南の州にこそ、最も美しいコテージ・ガーデンがみられるのである⁽¹²⁷⁾。(ibid.)

こうしたほとんど排他的ともいうべき、庭園におけるイングリッシェネスの称揚は、ロビンソンにおける顕著な特徴をなす⁽¹²⁸⁾。そしてここでもやはりロビンソンは、このイングリッシェネスの典型的アイコンとなったコテージ・ガーデンが、今にも消え去りそうな過去の残滓であることを強調する。

コテージ・ガーデンが古き良きあり方を捨て、新しいスタイルをとるとき、結果は惨憺たるものとなる。……コテージ・ガーデンを「カーペット・」ベッディングの庭園にしてしまうと、あらゆる生氣と性格が奪われる。……願わくば、それらの魅力がけっして衰えることのないように！(ibid.)

そしてロビンソンによれば、優れた造園家は、こうした希少となったコテージ・ガーデンの教える教訓を学び取らねばならない(ibid.)。

ここでやはり目を引くのは、彼の称賛するコテージ・ガーデンにおいては、かつての博愛主義やアロットメント運動をめぐる言説などにおいて顕著だった、実用性の問題（食糧や市場向け作物の生産）、あるいは貧民救済の問題がまったく顧慮されていないことである。このことは、なるほど美的な庭園を主眼とする彼の著書の目的からすればある意味で当然であろうが、しかし彼の称賛するコテージ・ガーデンが、明らかに現実の真正の農民のものであると考えられるだけに、奇妙な印

象を与える。たとえば次の引用文で、ロビンソンはコテージ・ガーデンを造る者が土地にたいする紐帯もつという、アロットメント運動の中で繰り返された論点を踏襲しながら、にもかかわらず、アロットメント運動の場合とは異なり、結局のところ単に美的な事柄にしか注意を向けていない。

コテージ・ガーデンの魅力の秘密とはなにか。コテージ・ガーデンを造る者は、自分の土地にたいして優しいので、年月が経つと、その土地は豊かで肥沃となるということである。……そこでは一般に、仰々しい計画がないおかげで、花々が自分の物語をじかに語ることができる。(ibid.)

このようにロビンソンにおいて、コテージ・ガーデンは明確に、真正なイングリッシュネスを体现するアイコンとなった。しかしそれは、実用性や貧民の現実から目を背け、単に内向きで、過去志向的で、美的なものと化すことによって可能になっているようにおもわれる。

ジーキル——ノスタルジックな真正性

同様のことは、ロビンソンの盟友、ジーキル (Gertrude Jekyll, 1843-1932) にもあてはまる。彼女はおそらく、最も有名な女性の造園家といってよい存在である。よく知られるように、ジーキルもまた、機械的・科学的な新しい造園様式を批判し、それにたいし、古き良きイングランドのコテージ・ガーデンを称賛した⁽¹²⁹⁾。彼女はその種の主張を随所で繰り返しているが、たとえば『家と庭』(一九〇〇年)の次の一節は、彼女の主張をよく要約してくれる。やや長いが引用したい。

およそ温帯の国で、わが愛しきイングランドの田舎道ほど、甘美で飾り気のない絵画的な出来事に富んだものはない。

そう考えるのは単なる愛国的偏見か、事実か。わたしは事実だと信ずる。イングランドの田舎道では、木や茂み、シダや花、野バラやスイカズラ、ツル草や瓜が花輪となって生い茂り、岩の多い土手や苔むした坂と結び合う。他にも人間的関心を引く出来事は多い。たとえば、労働者の粗末なコテージの住まい。快適な農園はそれ自体ほとんど一つの村であり、農家や一、二のコテージを含む。……こうしたコテージは古い類のもので、交通が便利になる以前に建てられた。今では綺麗なわき道となっているものも、当時は砂まみれの道にすぎなかった。これらのコテージは、田舎の真の建築を示す貴重な例である。というのもそれは、数マイルの範囲で手に入る材料を用いて造られたはずであり、自分の父祖のやり方以外知らない人びとの建てたものだからである。だからこそ、これらの農家やコテージは、土地自体から生えているようにみえ、田舎に特有の必要とその充足の手段とを示す、真の生きた (true and living) 表現となっているのである。⁽¹³⁰⁾

これに続けてコテージ・ガーデンについても語られるのだが、ここでもそれは美的であり、過去志向的なイングリッシュネスのアイコンとなっている⁽¹³¹⁾。とりわけジーキルが強調するのは、コテージが土着のものであり、土地伝来のもの、真正のものだという点である。それゆえ、このコテージも明らかに現実の貧しい労働者のものと考えられるにもかかわらず、やはりそこにおける改良、すなわち実用性の向上や貧民救済の問題はほとんど取り上げられていない。むしろそこに改良を加えることは、コテージ（・ガーデン）の土着性、真正性を破壊する行為として批判されることになる。

そのような反 \parallel 改良、過去志向性を顕著に示す例として、ジーキルの別の著作、『古きウェスト・サリー州』（一九〇四年）を挙げる事ができよう。彼女はそこで、この南イングランドのコテージ（・ガーデン）に加えられた、十九世紀後半以降の近代的な改良を、繰り返し批判している。

現在ここには、多くの人が住み、多くの建物が立った。そのせいで、かつての平穏と隠棲の魅力が否応なく失われたの

を嘆かずにはいられない。……数世代受け継がれてきた家具や設備をもつコテージは、いまや安物のけばけばしい品々が備えられ、ベニヤやワニスや安っぽい素材で飾られている。……この五十年ほどのあいだ、田園生活に生じた変化のせいで、多くの質素な田園の住まいが改築を余儀なくされた。完全に姿を消したものも多い。他のものも、古い性格を破壊する仕方で改築されている。⁽¹³²⁾

なるほどジーキルも、「古いコテージの多くが、はじめして、他の点でも不衛生である」ことを認める (ibid., p. 1)。しかしそうした現実の貧民の暮らしやその改良は、彼女の主な関心事ではない。彼女の関心は、いままでに消え去りつつある過去の「ローカルな伝統」(ibid., p. 5)を保存することにある。庭園についても事情は変わらない。ジーキルはコテージ・ガーデンについての節でいう。

これらの小さな「コテージ・」ガーデンは、人生の喜びと快活な気質を物語っているようにおもわれる。それこそが、われらが真正の (genuine) 田舎人の性格にみられる、かくも素晴らしい属性なのである。このことは、二世代前にはずっとはっきりしていた。当時、人びとの生活はもっとゆっくりしており、集中していて、素朴な田園生活はもっと充実した満足のものだった。(ibid., p. 277)

ここには、たとえば先にアロットメント運動関連の言説にみたような、現実のコテージ住人が怠惰で悪質でありうるという不信感、潜在的な社会秩序の攪乱への懸念など、存在しようもない。田園の人々は、単なるノスタルジックな過去のフィルターを通してみられており、土着の真正な伝統に属するかぎり、自動的に善良で幸福とみなされてしまう。

それどころか、ジーキルは明らかに現実の田園を目の前にし、その真正性を問題にしながら、時に当の現実は、ほとんど

空想的なものとは化してしまう。ジーキルはたとえば、先の『家と庭』におけるイングランドの散歩道やコテージ・ガーデンの記述に続き、田園の花咲く垣根のある道についていう。

その道は曲がり、先がみえない。さらに進むといたいなにか飛び出してくることか。人がいないので人間を恐れない野生の動物だろうか。……それとも輝く鎧を着た騎士だろうか。オークの下で踊る妖精たちの輪だろうか。暗い緑陰の光の中では、なにが出てきてもおかしくないのである。⁽¹³³⁾

ジーキルはたしかに、装飾的コテージにみられたような、かつての〈上から〉のコテージ改良とは違って、田園における土着の歴史的真正性を最重要視している。しかし他方で彼女は、博愛主義やアロットメント運動といったかつての〈下から〉のコテージ改良とも違って、あるいはさらに、〈上から〉と〈下から〉のコテージ改良を調停させるピクチャレスクな慈善とさえ違って、田園の貧民の現実には無関心なのである。真正な田園は、単に過去志向的で美的でノスタルジックな欲望の対象にすぎない。地理学者レルフの言葉を借りれば、それはほとんど「博物館化」(museumization)⁽¹³⁴⁾されている。そこでは、少なくとも十九世紀前半までのコテージ(・ガーデン)をめぐる言説にみられた様々な障害、交錯、曖昧さ、危険が、ほとんど視界から抜け落ちているのである。

結

かくして一八七〇年以降、ロビンソンとジーキルの時代、コテージ・ガーデンは明確に、イングリッシュネスを具現する典型的なアイコンとなった。しかもそこでは、その歴史的真正性が重視されるにいたっている。しかし同時にそれは、一種

の距離化であり、固定化でもあったようにおもわれる。すなわち、そのことによってコテージ・ガーデンは、単に美的・過去志向的・内向的なものと化し、田園の錯綜した現実と、その近代産業的な改良や進歩からは背を向けたものとなっているのである。

ヘルシンジャーの研究によれば、一般に一八七〇年以降、イングランドの田園は「死せる過去の表象」と化し、「失われた過去のイメージという共通の土俵の上で人々を結び合わせる」ものになったという。ヘルシンジャーにならっていえば、コテージ・ガーデンもまた、この想像上の国民的アイデンティティを支える、「化石化し（しばしば捏造された）歴史」の一つになったといえよう⁽¹³⁵⁾。

このような事態が生じた背景には、おそらく田園というものが、そもそもイギリスにとって、政治・経済的な重要性を失ってしまったことが挙げられる⁽¹³⁶⁾。一八六五年にアメリカ南北戦争が終結し、輸送手段が整備されると、イギリスでは、アメリカ等、海外からの農産物の流入が増加し、深刻な農業不況が起こる。そして一八七〇年代以降、イギリスは、実質的には農業国でなくなつてゆくのである。他方、一八七六年、ヴィクトリア女王がインド女帝となつて以降、イギリスにとって、とりわけ帝国主義が重要な問題となる。しかもボーア戦争は長期化し（一八八〇―一八九一年・一八九九―一九〇三年）、帝国の中心たるロンドンが病んでいるという意識も高まった⁽¹³⁷⁾。そのような中でイギリス人は、想像上のアイデンティティ、イングリッシュネスを求めて、非現実的でノスタルジックな対象となつた田園へと、内向きに、また後向きに逃避ないし回避していったと考えらえるのである⁽¹³⁸⁾。

一般にイギリスの庭園もまた、同様の逃避・回避の場となつてゆく。そのことはたとえば、まさにそうした田園・伝統回帰運動の担い手となつた雑誌、『カントリー・ライフ』（一八九七年発刊）に載つた、次の一九〇〇年の記事にも読み取ることができる。

ガーデニング。花への愛。それはわれわれの国民的性格に深く染み込んでいるようにおもわれる。今日のような騒擾の時代、戦争が行われ、噂される時代、激しい競争と弱肉強食の時代にあつて、ガーデニングは、人びとを静め洗練し、国民の家庭生活に染み渡ることによって国益を増す。いまやわれわれは、庭師の国民へと変貌している。⁽¹³⁾

とはいえ振り返れば、十八世紀以降コテージ・ガーデンは、このような単なる美的な避難所ではなかった。むしろそれは、長く複雑な歴史的過程をくぐり抜けた後に、はじめてそのようなものとなった。より具体的にいえば、コテージ・ガーデンは、様々な階級（ジェントリと貧民）が交わる場であり、〈上から〉と〈下から〉の改良のヴェクトル、装飾と現実、美と生産性、進歩と過去志向とが交錯する場であつた。

本稿の最後に、『タイムズ』誌に載せられた一九〇七年の記事、「イングランドの造園の理想」を引きたい。それは本稿がたどつたようなコテージ・ガーデンの歴史（の一部）を、二十世紀初頭の時点で振り返るものである。なるほどそこには、後知恵のないちじるしい単純化、歪曲がみられる。また著者は、コテージ・ガーデンをイングランド土着の国民的アイコンとすることに、なんら疑念を抱いていない。にもかかわらずそれは、本稿がたどってきた長く複雑な過程の片鱗を、おぼろげにもせよ垣間みさせてくれるのである。

イングランドのコテージ・ガーデンは、造園芸術の基準となり、この芸術を外來の倒錯から救い出した。カーペット・ベディングのシステムが華やかなりし頃でさえ、人々が「外來の」カルセオリアやゼラニウムやロベリアの列を嫌悪したのは、コテージ・ガーデンの姿をみたからであつた。コテージ・ガーデンは、牧草地や生け垣と同じく、イングランドの田園にとって自然だとおもわれた。……造園は、貧民が愛ゆえに営む国民的芸術である。上流の楽しみではない。だからこそ造園は、ほとんどすべての十九世紀芸術を侵食したあの趣味の倒錯から、かくも素早く立ち直れたのである。とは

いえ、もしも趣味のよい金持ちたちが、貧民の庭に見出したものを、自分の庭にも取り入れたいと望まなかったならば、やはりそれほど素早く立ち直ることはできなかっただろう。この点で、イングランドの造園は他の国々の造園とは大きく異なる。……われわれは心根において、田園の国民であり続けている。その点、フランス人やイタリア人とは異なり、ドイツ人さえをもしのぐ。(140)

註

- (87) Cf. esp. Sayer, *op.cit.*, Ch. 2, et passim; Bermingham, 'Simple Life', p. 52, et passim.
- (88) もっともナイト自身は、政界を退いた後の一八〇八年には、Stonebrook Cottage へ引っ越し、つましい現実のコテージに移り住み、隠遁生活を楽しむのだが。Cf. Andrew Ballantyne, *Architecture, Landscape and Liberty: Richard Payne Knight and the Picturesque* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), pp. 18, 37f.
- (89) John Wood, *Series of Plans for Cottages or Habitations of the Labourer . . . Tending to the Comfort of the Poor and Advantage of the Builder*, rev. ed. (1781), pp. 1, 5; cf. Daniel Maudlin, 'Habitations of the Labourer: Improvement, Reform and the Neoclassical Cottage in Eighteenth-Century Britain', *Journal of Design History*, 23 (1) (2010): 7-20.
- (90) John Claudius London, *An Encyclopaedia of Cottage, Farm, and Villa Architecture and Furniture* (1833; new ed. 1846; rpt. Tokyo: Athena Press, 2007), p. 763 [art. 1620].
- (91) 上註85参照。
- (92) Jane Austen, *Sense and Sensibility: Authoritative Text, Contexts, Criticism*, ed. Claudia L. Johnson (New York: Norton, 2002). その元となる作品は一七九五年に出版。新たな執筆開始は一七九七年。なおいくつかある日本語訳のうち、

本稿では次のものを参照した。ジェイン・オースティン（中野康司訳）『分別と多感』（ちくま文庫、二〇〇七）。

- (93) Austen, op.cit., Vol. II, Ch. 14, pp. 177f. [前掲訳書「三四三—四五頁参照」] ついで編者の Claudia Johnson は「ローナーのいうコテージが「装飾的コテージ」であると示唆している (p. 177n.)」。それに反し、主人公たちが実際に住むコテージは、カヤぶきでなくタイルぶきであり、不規則的ではなく左右対称である点で、そのような流行のものではないところ (pp. 23n.)。

- (94) Austen, op.cit., Vol. I, Ch. 18, p. 72. [前掲訳書「一三七—三八頁参照」]

- (95) Ibid., Vol. I, Ch. 14, pp. 54f. [前掲訳書「一〇三—一〇四頁参照」]

- (96) 『マンスフィールド・パーク』で改良家の代表として挙げられているのは、先に言及した造園家、レプトンである。

Cf. Alistair M. Duckworth, *The Improvement of the Estate: A Study of Jane Austen's Novels* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1971).

- (97) ただしこのコテージ改良は、あくまでジェントリが必要に迫られ、旧来の地所での暮らしに近づくために行うものにすぎない (Cf. Austen, op.cit., Vol. I, Ch. 6, pp. 23f. [前掲訳書「四二—四四頁参照」])。主人公たちが住んでいた旧来の大地所における改良（『マンスフィールド・パーク』を先取りするような）に関しては、むしろ批判的に描かれている (ibid., Vol. II, Ch. 11, pp. 159f. [前掲訳書「三〇七—〇九頁参照」] ; cf. Duckworth, op.cit., pp. 90f.)。コテージや改良に関するこうした対立する見解の交錯は、『分別と多感』の最も興味深い点の一つである。

- (98) Margaret Oliphant, *Miss Marjoribanks* (1866; London: Penguin, 1998), Ch. 51, pp. 485f.; George Eliot, *Middlemarch: A Study of Provincial Life: An Authoritative Text, Backgrounds, Criticism*, ed. Bert G. Hombach, 2nd ed. (1871-72; 1874; New York: Norton, 2000), esp. Bk. 1, Ch. 3, pp. 20f.; Bk. 1, Ch. 9, pp. 49f. [シモーシ・エリオット（工藤好美・淀川郁子訳）『ミッドルマーチ』（講談社文芸文庫「一九九八」・特に第一巻「六一—六四」「一五七—五九頁参照」）エリ

オットは、コテージ改良の際に主人公が参照したものとして、先に触れたラウドンの著作を挙げている。

時代は下るが、E・M・フォスター (Edward Morgan Forster, 1879-1970) の有名な小説、『ハワース・エンド』 (*Howards End*, 1910) もまた、コテージをめぐる階級間の交錯とその危険を描いたものと読むことができるであろう。ただしそこはコテージそのものが完全に美化されている点は、後の時代の特徴といえるかもしれない。

- (99) 'Cottage Allotments', *The Penny Cyclopaedia of the Society for the Diffusion of Useful Knowledge* [1833-43], Vol. 8 (London: Knight, 1837): 89.

- (100) たゞし、Lawrence, op.cit., pp. 3f.; Pearson, op.cit., pp. 10f, 17, 26ff.; *An Essay on farms of Industry*, pp. 19f.

- (101) London (ed.), *A Manual of Cottage Gardening* . . . , pp. 5f.

- (102) Pearson, op.cit., p. 10.

- (103) London, *An Encyclopaedia of Gardening*, new ed. (1835; rpt. New York: Garland, 1982), p. 1227.

- (104) ホーウィットはたとえば次のようにいう。「ああ、コテージの暮らし。装飾的コテージを建て、そこに住みたいという望みを掻き立てたのよりもずっと多くのことが、コテージの暮らしの名の下には潜んでいる。その圈内には膨大な人間的関心が含まれるのに、世間は目もくれない。愛と希望。試練と闘争。災難、死、葬式。祭りや宗教の集い。われらが兄弟姉妹は冷遇に悩み、必要に迫られ動き身を寄せ合う。どれほどのことが真に知られていないことか。その結果、どれほどのことが誤解されているか」(Howitt, op.cit., II. 138; cf. II. 132)。

- (105) Howitt, op.cit., II. 138.

- (106) 前掲拙著『イギリス』第七章、特に三。

- (107) Reginald Blomfield, *The Formal Garden in England*, 2nd ed. (London: Macmillan, 1892), p. 10. 同書の初版は一八九二年一月だが、早くも同年十月に第二版が出ている。

- (108) John Dando Sedding, *Garden-Craft Old and New* (1891; new ed., London: Kegan Paul, 1895), pp. 10, 150.
- (109) Edward S. Prior, 'Garden-Making [I]', *The Studio*, vol. 21, issue 91 (October 1900): 31.
- (110) Adamson, *The Cottage Garden*. (2nd ed., 1856), op.cit., p. 12.
- (111) *Ibid.*, pp. 51f.
- (112) Jan Marsh, *Back to the Land: The Pastoral Impulse in England, from 1880 to 1914* (London: Quartet Books, 1982).
 ならに次の研究参照: Dennis Hardy, *Utopian England: Community Experiments 1900-1945* (London: E & FN Spon, 2000).
- (113) Horace Townsend, 'An Artistic Treatment of Cottages', *The Studio*, vol. 6 (October 1895): 29f.
- (114) 'Rural England', *The Art Journal*, 43 (December 1881): 376. L. G. Seguin & *Rural England* (London: Strahan, 1881) の書評。
- (115) 『タイムズ』紙の展覧会紹介欄にある次の発言(一八九八年)参照。「教育のある大勢の愛好層が、『アリンガムの作品を』ますます魅力的なものと考えているようになってきている。そしてそれを所有したいとつねに変わらぬ願い続けている。それもなんら不思議ではない。というのも、だれもがコテージとガーデンを愛するからである。」「Art Exhibitions', *The Times* (March 28, 1898), 15. アリンガムと周辺の画家たちについて『*Happy England as Painted by Helen Allingham, R.W.S.: with memoir and descriptions by Marcus B. Huish* (1903; London: Black, 1909), Ch. 10, 'Mrs. Allingham and her Contemporaries', pp. 181-96.
- (116) Helmreich, *English Garden*, pp. 78ff.
- (117) 比較的早い代表的な例を挙げれば、William Young (Architect), *Picturesque Examples of Old English Churches and Cottages*, from sketches in Sussex and adjoining counties (Birmingham, 1869); Ralph Nevil, *Old Cottage and Domestic*

- Architecture in South-West Surrey, and Notes on the Early History of the Division* (Guildford: Billing, 1889, 2nd ed. 1891); *Old Cottages and Farmhouses in Kent and Sussex*: illustrated in one hundred colotype plates from photographs by W. Galsworthy Davie, with some descriptive notes and sketches by E. Guy Dawber (London: Batsford, 1900); *Old Cottages, Farm Houses, and Other Half-timber Buildings in Shropshire, Herefordshire, and Cheshire*: illustrated on one hundred plates reproduced in colotype from a special series of photographs taken by James Parkinson, with introductory and descriptive notes and numerous sketches by E.A. Ould (London: Batsford, 1904); *Old Cottages, Farm-Houses, and Other Stone Buildings in the Cotswold District*: illustrated on one hundred colotype plates from photographs specially taken by W. Galsworthy Davie, with an introductory account of the architecture of the district accompanied by notes and sketches by E. Guy Dawber (London: Batsford, 1905); Charles Holme (ed.), *Old English Country Cottages* (London: The Studio, 1906); *Old Cottages and Farm-House in Surrey*: illustrated on one hundred colotype plates from photographs specially taken by W. Galsworthy Davie, with an introduction and numerous sketches by W. Curtis Green (London: Batsford, 1908).
- (118) たんぽぽ、アリンガムが Unstead Farm の描写に際して行った農業的現実の排除と美化に関し、Helmeich, *English Garden*, p. 77.
- (119) Lucy Hardy, 'The Cottage Garden', *Country Life Illustrated*, Vol. II, No. 44 (November 6, 1897): 483-85 [483, 485].
- (120) Harry Batsford の回顧手記によし、Hector Bolinho (ed.), *A Batsford Century: The Record of a Hundred Years of Publishing and Bookselling 1843-1943* (London: Batsford, 1943), p. 44. つづいた当時の建築史的関心については、デイヴィド・ワトキン『建築史学の興隆』(中央公論美術出版、平成五年)、第四章『イギリス的伝統』の歴史・一九〇〇年—一九四五年」参照。

- (121) E.g., *Old Cottages and Farm-Houses in Surrey*, op.cit., pp. 1-5.
- (122) 'Art in the Garden', *The Art Journal*, n.s. 21 (January 1882): 10f. また先にみた整形式庭園の擁護者、プロムフィー
ル・ラニエール⁶、まゆにそれがイギリス古来のガーデニングの方式であると主張すること、それを擁護したのであ
た。したがって彼らによれば風景式庭園は、本来のイギリス庭園からの逸脱にすぎない。 Cf. Bloomfield, op.cit., Ch.
4, et passim; Helmreich, *English Garden*, Ch. 4.
- (123) なお、ロビンソンが「自然風」の庭園を推奨した背景に、当時の進化論の影響をみる論者もある。 Cf. Anne L.
Helmreich, 'Re-presenting Nature: Ideology, Art, and Science in William Robinson's "Wild Garden"', Joachim Wolschke-
Bulmahn (ed.), *Nature and Ideology: Natural Garden Design in the Twentieth Century* (Washington, D.C.: Dumbarton
Oaks Research Library and Collection, 1997), pp. 81-111.
- (124) Cf. Richard Bisgrove, *William Robinson: The Wild Gardener* (London: Frances Lincoln, 2008).
- (125) William Robinson, *The Wild Garden; or, our Groves and Shrubberies made beautiful by the Naturalization of Hardy Ex-
otic Plants* (London: John Murray, 1870), pp. 3f.
- (126) William Robinson, *The English Flower Garden: Style, Position, and Arrangement; followed by a Description of all the
Best Plants for it: their Culture and Arrangement*, 2nd ed. (London: John Murray, 1889), p. 8.
- (127) このように、南部を産業的な北部と対比し、古き良きイングリンドの保たれた(神話的な)場所とするのは、当時
広くみられた。典型的な例として、ギヤスケル (Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810- 65) の小説『北と南』(*North and
South*, 1854-55) が挙げられよう。
- (128) たとえばロビンソンは、『イングリンドの花の庭』の第一四版(一九二六年)に付けた序文で次のようにいう。「異国
からあまりにも多くのものがわが国の庭園に入ってきた。その結果、ほとんど立派に育つ見込みのない灌木を植える

にいたってゐる」(Robinson, 'Preface to New Edition', *The English Flower Garden*, 15th ed. [London: Murray, 1933], p. xiii.) の 'Preface' はもともと第一四版に 'New Preface' としてつけられたもの。

こうした排外性それ自体は、本稿の序で確認した通り、十八世紀後半の風景式庭園論にもみられた。とはいえそれは、たとえば世紀前半の進歩主義者、ラウドンの「ガーデネスクな庭」が、外来植物の輸入を積極的に推奨していたのとは著しい対照をなす(前掲拙稿『ガーデネスク』参照)。また一般に、外来植物の移植は、イギリスの帝国主義的拡大という文脈では十九世紀後半に入っても称揚されている。たとえば、東インド会社を引き継いだインド局 (India Office) に属し、植物の移植に携わっていた旅行者・地理学者、マークム (Sir Clements Robert Markham, 1830-1916) の次の発言(一八六二年)を参照。「植物界の貴重な産物を地球上の様々な国民のあいだで配分すること。すなわち、植物が自生している国から、適切な土壌と気候の国へと導き入れることは、文明が人類にもたらした最大の恩恵の一つである。その結果、快適さと利益はたちどころに著しく増大するだろう。しかもその効果は、工学技術が最も誇りにする記念物などより、ずっと長続きする」(Markham, *Travels in Peru and India: while Superintending the Collection of Chinchona Plants and Seeds in South America, and their Introduction into India* [London: Murray, 1862], p. 60)。こうしたイギリスのいわゆる植物帝国主義については、L・H・ブロックウエイ(小出五郎訳)『グリーンウェポン——植物資源による世界制覇』(原著・一九七九)・社会思想社、一九八三)参照。

女性ということもあってか、ジーキルについては邦語文献が比較的多い。たとえば以下を参照。島村聲「ある十九世紀女性庭園家の生涯と思想——Gertrude Jekyll について」、『金城学院大学論集・英米文学編』三七(一九九六)・七五—一六・宮前保子『ランドスケープ研究』六三(五)(二〇〇〇)・四〇三—四〇八・同『イングリッシュガーデン』の源流——ミス・ジーキルの花の庭』(学芸出版社、二〇〇一)・土屋昌子訳『ジーキルの美しい庭——花の庭の色彩設計』(平凡社、二〇〇八)。

- (130) Gertrude Jekyll, *Home and Garden: Notes and Thoughts. Practical and Critical of a Worker in Both* (1900; London: Macmillan, 1984), pp. 70, 72.
- (131) ジーキルにおいては、一般に庭園そのものがイングリッシュネスのアイコンとなっている。彼女は別の著作でいう、「庭園への愛は、すでにイングリッド人の心に深く植え付けられており、急速に拡大しつつある」(Gertrude Jekyll, *Wood and Garden* [London: Longmans, 1899], p. 1)。
- (132) Gertrude Jekyll, *Old West Surrey: Some Notes and Memories* (1904; rpt. Menston: Scolar Press, 1971), pp. viii, 1.
- (133) Jekyll, *Home and Garden*, p. 78. ちなみにジーキルは目が悪く、現実の庭園に赴かずにデザインする時間も多かった。この種の空想的な叙述は、明らかに読者の期待に媚びるものであると同時に、そうした彼女の伝記的事実と関係するのかもしれない。
- (134) エドワード・レルフ (高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳)『場所の現象学』(筑摩書房、一九九九)、二二四頁以下参照。
- (135) Elizabeth K. Helsinger, *Rural Scenes and National Representation: Britain, 1815-1850* (Princeton: Princeton University Press, 1997), p. 7.
- (136) Cf. Alun Howkins, 'The Discovery of Rural England', Robert Colls and Philip Dodd (eds.), *Englishness: Politics and Culture 1880-1920* (London: Croom Helm, 1986), pp. 62-88. たまたまこの種の研究には、たとえば次のような反論もある。Peter Mandler, 'Against "Englishness": English Culture and the Limits to Rural Nostalgia, 1850-1940', *Transactions of the Royal Historical Society*, 6th series, 7 (1997): 155-75.
- (137) E.g., Andrew Mearns, *The Bitter Cry of Outcast London: An Inquiry into the Condition of the Abject Poor* (1883), ed. Anthony S. Wohl (New York: Humanities Press, 1970), pp. 55-77.

(138) Cf. Marsh, op.cit. この点を考える上で示唆に富むのは、ギヤスケルの小説、『荒野のコテージ』(*The Moorland Cottage*, 1850)であろう。その中心となる舞台は、主人公一家が住む、ほとんど自給自足的なコテージとガーデンである。それが近くの大地主の邸宅や庭園とも対比される(両者の対比はまた、土着のイングリッシュな純朴さと、フランス的な洗練との対比とも重ねられる)。重要なのは、主人公の恋人や兄弟などの男性が、このコテージとガーデンを離れ、外部、特に海外(オーストラリアやアメリカ)へと脱出しようとすることであり、しかもそれが兄弟の場合、悲劇に終わることである。つまりこの小説は、コテージ(・ガーデン)への内向と海外への外向とを明確に対比させており、その教訓は、前者を善とし、後者を悪とすることにあるのは疑いない。たとえば主人公はいう。「もし善良で思慮深い男たちがみな、どこか新しい国へと脱出してしまったなら、哀れな愛する古いイングランドはどうなってしまうの?」

(*The Works of Elizabeth Gaskell* [London: Pickering, 2005], vol. 2, Ch. 7, p. 55)。さらに、大地主が所有するコテージ群に住む借地農が、金銭に関し抜け目なく信頼できない存在であり、因習的な考え方の地主とは調和的な関係になることも、いまだコテージに内在していた階級的軋轢の危険を描くものとして注目される(その地主はかならずしも悪人ではないが、小作人への態度に関する限り、コベット [William Cobbett, 1763-1835] による不在地主への批判を想起させる。Cf. Cobbett, *Rural Rides*, Everyman's Library [London: Dent, 1912], Vol. 1: 38 [November 21, 1821]; cf. David Thomson, *England in the Nineteenth Century 1815-1914* [Hammondsworth, Penguin, 1950], Ch. 1)。

(139) [Anon.], 'Heatherbank and Oakwood: The Residence and Garden of Mr. G.F. Wilson, F.R.S.', *Country Life Illustrated*, Vol. 8, No. 192 (September 8, 1900), 304-10 [304]. 同様の発言は無数に挙げられるであろうが、たとえば冒頭で引いたウィーダの「庭園」にもみられる。彼女はいう。「[コテージ・ガーデン]では、かつてシェイクスピアやミルトンやベン・ジョンソンが書いた『花束』を、今なお摘むことができる。そこに生えるあらゆる花や小花は、かつてオフィリアや『シェイクスピア』『冬物語』の」ペルディータが呼んだ名で今もなお知られる。……現在、貧民の生活の『現

『実』(realism)は、汚穢、飢餓、犯罪、泥酔、嫉妬にしかないと考えられる。しかし今日もお、これらのコテージ・ガーデンが、なるほど多くはなくなったにせよ、いまだシェイクスピアやベン・ジョンソンの地に残っていると知るところは喜ばしい」(Ouida, op.cit. [1895], p. 49)。

(140) 'English Ideals of Gardening', *The Times* (November 16, 1907), 3. この記事は古い整形式庭園を擁護し、風景式庭園を批判する点で(さらには wild なものを批判する点で)、先に挙げたブロムフィールドに親近的だが、しかしコテージ・ガーデンを自然なものとして擁護する点では、その敵対者のロビンソンとも通ずる。

なお、コテージ・ガーデンとイングリッシュネスとの結びつきを考える上では、それが海外との関係、あるいは海外からの視点でどうみられたかを検討することが重要である。この点については本稿でも若干触れたが、不十分であり今後の課題としたい。少なくともそれが重要なことは、次のような発言からも知られるであろう。「外国人がわが国を訪れたり、われわれが外国旅行から帰ってきたときに、まさきに目を喜ばせ満足させる眺めは、道端のコテージであり、その小さな明るいガーデンである。それは多くの古い種類の花々を宿し、しかもコテージ住人の果物と野菜の供給源となつてゐる」(P. H. Dichfield, *Picturesque English Cottages and their Doorway Gardens* [Philadelphia: Winston, 1905], p. 45; cf. idem, *The Charm of the English Village*, Illustrated by Sydney R. Jones [London: Batsford, 1908], p. 84)。この発言を行った歴史家、ディッチフィールド(Peter Dichfield, 1854-1930)は、『消えゆくイングラント』(*Vanishing England* [London: Methuen, 1910])のような無数の著作によって、真性だがノスタルジックな、イングリッシュネスの典型としての田園というステレオタイプを固定するのに貢献した人物といつてよい。